

## はしがき

著者	野村 竜仁
雑誌名	神戸市外国語大学外国学研究
巻	73
発行年	2009-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00000559/">http://id.nii.ac.jp/1085/00000559/</a>



## はしがき

研究班代表 野村 竜仁

本書は「ヨーロッパと啓蒙主義」をテーマにした研究班の活動から生まれた論集であるが、同時に外国学研究 53『書物と印刷の比較社会史』の研究を継続発展させたものとも言えるだろう。『書物と印刷の比較社会史』では、ヨーロッパおよび日本を研究対象とし、印刷物の社会的影響が検討されたが、今回の研究班では対象地域をヨーロッパにしぼり、啓蒙主義という視点を設定した上で、各研究者がそれぞれの角度からこのテーマに取り組んだ。

啓蒙主義について、エルンスト・カッシーラーはその著書である『啓蒙主義の哲学』で次のように述べている。

当時の人々が意識していたよりも遥かに多く、啓蒙主義の時代は内容の点ではそれに先立つ諸世紀に依存していて、啓蒙主義は単にその遺産を継承したにすぎなかった。つまり啓蒙主義は、本当に新しい全く独自の思想内容を生み出したというよりも、むしろ遺産を整理し選別して発展精製させたというべきであろう<sup>1</sup>。

近世から近代への大きな転換期に現れた啓蒙主義は、過去の遺産を集積するとともに、社会の一大転換期を支えた思想であった。その展開は、ロイ・ポーターが指摘するように、「政党とか宗教セクトのような歴史を動かしたある種の主体とは違って、公式の規約も教義も綱領もなかったし、政治組織をつくることも」なく<sup>2</sup>、むしろその多様な様相を特徴としている。過去の遺産の集積と、そこから生まれた多様性を特徴とする啓蒙主義は、全ヨーロッパ、さらに新大陸にいたるまで、国境と言語圏を越えて広範に伝播・波及し、その後 19 世紀欧米の文化と社会にも多大な影響を及ぼした思想的潮流である。

こうした啓蒙主義に対して、多角的な視点からのアプローチを試みるために、イギリス、スペイン、旧ハプスブルク帝国領、ドイツなど専門の異なる研究者による共同研究を行い、またそのためのアプローチの方法として、書物や読書に関する社会文化史的な視点を設定した。活動期間も短く、個々の研究を比較検討する段階に

<sup>1</sup> エルンスト・カッシーラー、『啓蒙主義の哲学 上』（中野好之訳）、筑摩書房、2003、p. 12.

<sup>2</sup> ロイ・ポーター、『啓蒙主義』（見市雅俊訳）、岩波書店、2005、p. 14.

までは至っていないが、次なるステップとして、書物やパンフレットといった印刷物を中心に、ヨーロッパ全域を視野に入れながら、人的ネットワークや印刷物を介して啓蒙主義的な考え方や価値規範がどのように普及していったのか、またルネサンスの時代から続く人的交流や印刷業の伝統、フランス革命など大きな社会変革を惹起した道筋、後世への影響等についても検討を加え、ヨーロッパ各地における啓蒙主義の位置づけ、影響力の違いに留意しながら、「啓蒙主義」思想の具体的な形成過程と影響力について検討することを最終目標として、今後さらなる分析作業を続けてゆきたいと考える。